

「キリストが生まれるために」

丸山 勉

〔聖書〕ガラテヤの信徒への手紙 4章 8～20 節

ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました。しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています。あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です。わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。兄弟たち、お願いします。あなたがたは、わたしに何一つ不当な仕打ちをしませんでした。知ってのとおり、この前わたしは、体が弱くなったことがきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました。そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、また、キリスト・イエスでもあるかのように、受け入れてくれました。あなたがたが味わっていた幸福は、いったいどこへ行ってしまったのか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとしたのです。すると、わたしは、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのですか。あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。わたしがあなたがたのもとにいる場合だけに限らず、いつでも、善意から熱心に慕われるのは、よいことです。わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

1. 「宗教」は飼い馴らしのシステムか

司馬遼太郎の言葉。「ふつう、イスラムの世界、あるいはモーゼが出てきたころの古代ユダヤ教の世界、荒れ野で動物を飼っている遊牧の民たちの世界を思いますと、向こうあたりで成立した宗教というのは、どうも人間を飼いならずシステムではないかと思うのです。人間というのは飼いならされないと一羊や、山羊や、牛や馬のように飼いならされないと一野獣なんだということで、飼いならしのシステムとして、イスラム教、あるいはそれ以前からあるユダヤ教、次いでキリスト教というのが成立してきたと思うのです。」

そうなのか？ 「人間を押さえつけるもの」、またその権威付けとして信仰は捉えられるべきなのではないでしょうか？ そう考える人たちは多い。では皆さんは？ 私たちはキリスト教信仰を信じる者ですが、何か「飼い馴らされている感じ」があるのでしょうか？

2. アブラハムの「信仰」を引き合いにして

この「ガラテヤの信徒への手紙」は、正にそのような飼い馴らしや押え付けから、人間を根本的に解放してくれるものとして、イエス・キリストの福音というものがある、と語っている。これまでも「律法主義」から私たちは自由にされているということをパウロの言葉から聞いてきた。3章では「ただ信仰によって救われる・自由にされる」ということをパウロは、アブラハムのことを引き合いに出して語っている。前の章の3:6で「それは『アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた』と言われているとおりです」と。アブラハムは一生懸命ひたすら神様の掟に従ったから義とされたと言うのではない、ただ（御言葉を自分へと語られる）「神を信じた」だけ。そしてそれは「盲信」とは違う。私たちのわざ（行い）の前に、まず神様の語りかけがあるということ。そしてそれに「応える」ということ。

3. パウロの熱い思いが響いている

ガラテヤの信徒への手紙を読んで思わされること。それはこの教会の人々に対するパウロの熱い思いを感じないではいられない。4:19では「わたしの子どもたち」と呼びかけている。自分の子ども。つまり愛情と責任を持ちながら、私はどうしてもわが子に等しいあなた方にこのことはどうしても語りたいのだと、今は離れた場所にいるパウロは語っている。既に信仰を頂いたガラテヤの教会の人々に、イエス・キリストの恵みから逸れずに、そこに立つことこそが信仰なのだ、表現を色々変えながら語っている。私は特にそのように、教会を形作る一人ひとりの魂への配慮をするパウロ、牧会者パウロということ強く思わされた。彼は本当にこのガラテヤ教会を愛している。

4. このことはやり過ごすことはできない

4章13～15節を見ると、この両者の出会いの初めの状況が分かる。弱い体を抱えながら福音を告げ知らせたパウロを、ガラテヤ地方の人々はとても喜んで迎えました。そしてここに信徒の群れ＝教会が生まれた。しかし、「あの幸福はいまどこに行ってしまったのか？」と悲しい思いを抱いていることを隠さない。それはその前の8～11節でも心の中の心配事を語っている。どうしてもよければやり過ごすことも出来たと思う。しかし、言わなければならない。それは「自分の子どもだから」です。皆さん、父親に注意されたことはないでしょうか？ 私は今でも

思い出すことが一つある。確か中学生の時でした。何かの折に、母について蔑んだようなことを言った。その後二人だけのとき、父は言葉を震わせ、手をわなわなさせて私に注意した。「あれはよくないことだ、もう言うな」と。静かに、しかし、深く響く言葉で私に語った。

5. 律法主義的な教師に振り回されるな。

言葉が生きるかどうかは、そこにある「関係性」がものすごく大事です。それこそ変な付度をしないで遠慮なく言えるというのはそこに「愛」があるからです。そして「愛」というものは、なあなあにしない、曖昧で済ませない。パウロという人はそういう人だった。「あの幸福はどこに行ったのか？」と嘆き、その原因についてパウロはこう語ります。16 節で、私が福音の真理を語ったからいけなかったのか？ 私とあなたがたは敵対関係になってしまったのか？と反問しする。そうではなく、17 節で「あの者たち」があなた方を惑わしたからだろう、と言う。ユダヤ人の律法主義的な教師が入り込んで、律法を遵守しない信仰などあり得ない、異邦人が割礼も受けていないなんてどういうことか！？ と強い口調で説得したのです。それで教会は混乱してしまいました。パウロは 17 節で明確にそんな者たちに振り回されるな、と言っている。それは、善意ではなく、あなた方を引き離す惑わしなのだ、それに気付いて欲しいと。パウロは本当に心を痛めた。20 節では「途方にくれている」とまで言っている。

6. 「飼い馴らし」からの解放

初めに「飼い馴らし」と言いました。宗教が飼い馴らしというのは、ある面鋭い洞察だと思う。入り込んできた律法主義的な教師たちになびけば、信仰とはそういうものに陥ってしまったと思います。そうなったなら、今のキリスト教はなかったかも知れないのです。パウロはガラテヤの教会の人々に原点を思い起こさせる。それは「私たちが神様を知るのではなく、神様が私たちを知ってくれている」という事実です。4:8~9 節。まことの神はただお一人ではないか！そのお方によって、私たちは奴隷状態（飼い馴らし）から自由にされて、解放されたのではなかったのか？その状態に逆戻りするとしたら、それは私の労苦が無駄になってしまったことになるよとパウロは言う。

7. 「キリストが、あなたがたの内にかたち作られるまで」

そしてもう一度 19 節を見てみたい。「わたしの兄弟たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしはもう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」。パウロは、「産もうと苦しんでいます（口語訳「産みの苦しみをする」）」という。これは母の痛み。自分の体を痛める痛み。しかし、新しい命を産むための痛みです。新しい命とは何でしょうか？—キリストです！ キリストご

自身。あなた方の教会の中に「キリストが再びかたちづくられるまで」わたしはあなた方のために祈り、労苦を惜しまないよと言う。言い換えると、「キリストの命はどこに消えてしまったのか？ 教会の生命はキリストの無償の恵みではなかったのか？ あの十字架の愛ではなかったのか？ 3:1 をご覧下さい。「ああ、物分りの悪いガラテヤの人たち、だれがあなた方を惑わしたのか。目の前にイエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示れたではないか」。あの十字架を無視するということは、キリストを再び殺すということと同じだ。そうであれば、おかしい言い方かもしれないが、もう一度キリストに生まれてもらおう。私はそのために産みの苦しみをすると、言っているのです。…このパウロの熱い思いは、自分の体験、経験に裏打ちされているのです。罪びとのかしらである自分がどこから救われたのか。その原点をいつもパウロは見っていました。そしてそこにしか人間が神様の前に義とされる道はないのだ、ということをパウロがガラテヤ書だけでなく、どの手紙でも書いていますよね。「教会」が生きるか死ぬかは、この一点にかかっていると、言っているのではないかと思います。

川越教会の上にも十字架が掲げられています。単なるシンボルではありません。「ここに救いがある」と宣言しているのです。皆さんも、川越教会がそのキリストの恵みだけを伝え、また、その恵みの中に一緒に生きる教会として歩むことが出来るように、祈って下さい。牧師の説教のためにも祈って下さい。そして、まず私たち自身が喜んでイエス様の命の中に生きることが出来るよう、お互いのために祈り続けて参りましょう。

主の恵みがお一人ひとりに豊かにありますように！